

列強の対立基軸

複雑をきわめる20世紀初頭、第一次世界大戦前夜の国際情勢では、対決の基軸はオスマン帝国領への進出をめぐる【1: _____】対イギリスの対立である。これが19世紀末からどのように形成されたかを見ていこう。

ドイツの政策転換 No.138、No.160 参照

このような対決構造ができるきっかけとなったのは、ドイツの政策転換だった！

- 1) 1890年以前は、宰相【2: _____】の主導下、①ドイツは国内の課題に専念すること、そのためには ②普仏戦争の恨みをはらそうとする【3: _____】を国際的に孤立させる。そのために、オーストリア、イタリア、イギリス、ロシアなどの列強と直接・間接に結びついて、フランスが戦争できないようにしておくことが必要だった。
- 2) 1888年に親政を始めた【4: _____】は、1890年ビスマルクを退任に追い込んだ。直接的原因は社会主義者鎮圧法の存続についての意見の対立だった。同年、ロシアはビスマルク時代に締結した独露再保障条約の更新を求めたが皇帝は対外行動の自由度を高めるため、これを拒否した。
- 3) このためロシアは工業化の資本を得るためフランスに接近、ビスマルクが最も恐れていた【5: _____】が1891年合意、94年に正式に成立し、1917年まで存続した。これによりフランスは外交的孤立を脱した。
- 4) その後、ドイツは【6: _____】建設を中心に【7: _____】をとり、イギリスの3C政策に対抗し、90年代末以降は、海軍を拡張して建艦競争を始め、イギリスの覇権に挑戦し続けた。

イギリスの政策転換

イギリスは3C政策をとりつつ、世界のどの国とも同盟を結ばない【8: _____】※政策をとってきたが、次のようにこれを修正した。
※クリミア戦争(1856)から日英同盟(1902)まで

- 1) 1902年、【9: _____】を締結
No.159で詳述したように、イギリスは南アフリカ戦争(1899-1902)を戦っており、義和団の乱鎮圧後も中国東北部を占領して極東において南下を実現しようとするロシアを止める余裕がなかった。そこで極東の新興国日本と対等の軍事同盟である日英同盟※を結び、日本はこれに依拠して【10: _____】(1904-05)を戦った。

※日英同盟を状況に即して単純化して説明すれば、日本とロシアが戦争した場合イギリスは中立を守るが、いずれかの国がロシアに荷担した場合はイギリスは日本と同盟して戦うというもの。

現実には日露の戦争だったのでイギリスは中立。よってイギリスはロシア艦隊のスエズ運河通航を認めざるを得なかった。ロシアの主力艦がスエズ運河を通らず喜望峰を回ったのは、イギリスが通航を拒否したからではなく、幅が大きすぎて通航できなかったのだ。この点を誤解している諸君は多い。通航可能なサイズの軍艦は主力艦と分かれてスエズ運河を渡ったものの、通航後長いこと洋上で待機せざるをえなかった。しかもイギリス勢力下の港での補給は事実上拒否され、露仏同盟を締結しているフランスの勢力下の港でも、フランスが関与を嫌ったため積極的な協力は得られなかった。バルチック艦隊は補給・休養不足の上当然に訓練不足でへろへろになって対馬海峡に現れた。なお、スエズ運河も通らず喜望峰も回らず、ユーラシア大陸北方(ロシア・シベリア沖)の北極海を通して大西洋側と太平洋側を結ぶ北極海航路は実は極東に到達する最短ルートである。日本海海戦は5月27日、冬期ではないがこの航路は使用不能。現代でも、夏期2ヶ月のみ通航可能で、しかも砕氷船の同行が必要である。

日英同盟は、英露協商(1907)の締結で存在意味が低下しながら存続・改訂され、第三次日英同盟は日本の第一次世界大戦参戦の口実となった。戦後、四カ国条約(1921)で廃棄された。

- 2) 1904年、【11: _____】を締結
No.162で詳述したように、ファシヨダ事件(1898)の解決以降、ドイツ帝国の勢力拡大に直面する中で、時間をかけて対フランス関係は融和に向かい、イギリスが【12: _____】を確保し、フランスが【13: _____】を確保(1912年、保護領とする)し、そしてドイツに対してはイギリス・フランスが連携して強硬姿勢を崩さず、何も与えないという共同のスタンスを確立した。これが英仏協商である。ドイツはこれに抗議し、【14: _____】を二度も起こした。

《重要》イギリスは「世界の銀行」としての地位は揺るがなかったが、工業力は世界第3位に転落し、重化学工業力がものを言う現代戦では、もはや1国だけではドイツに対抗できないと判断した！

- 3) 1907年 【15: _____】締結 本項では、オーストリア=ハンガリー帝国をオーストリアと略記する。
日露戦争に敗れたロシアは再びバルカン半島南下政策に転じると、ドイツ・オーストリアと対決するに至った。イギリス・フランスは、イラク・シリア方面への進出をねらっていた。イギリスとロシアは中東とチベットでの相互の権益を確認する※ことによって和解することができた。こうして、英露協商が成立した。
イギリス・フランス・ロシアは、ドイツ・オーストリアを共通の脅威とみなして、協力してそれぞれの国益を守ろうとした。この3国の連携関係を三国協商と呼ぶ。

※英露協商はこう定めた。イランに関しては北部がロシア、南東部がイギリスの勢力範囲。アフガニスタンはイギリスの勢力範囲。チベットは両国が不干渉。

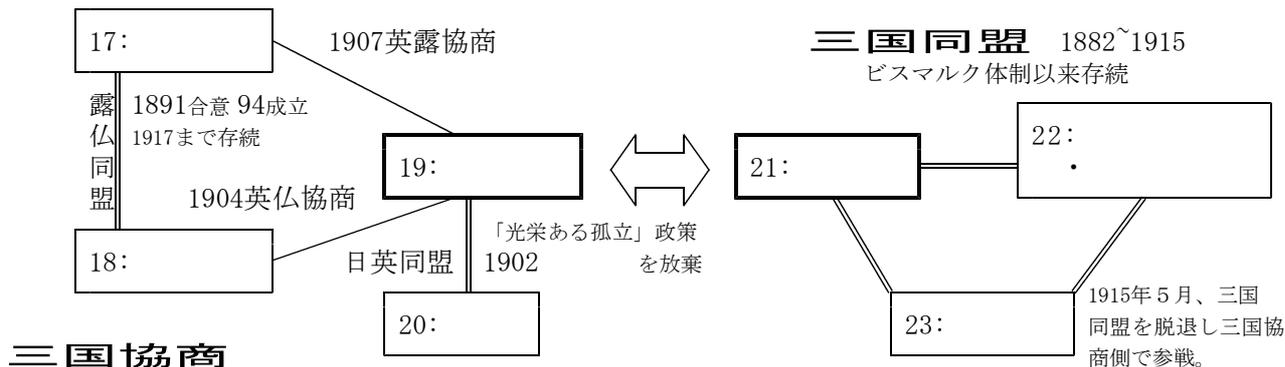
なお、英露協商締結の翌年(1908)、オスマン帝国では青年トルコ革命が起こり、立憲制が宣言されミドハト憲法が復活した。この混乱に乗じてブルガリアが独立した。

二大陣営の形成

- 1) 一方、No.136で詳述したように、かつてビスマルクはドイツ・オーストリア同盟(1879)という強力な軍事同盟を締結し、それは存続していた。そこに、フランスがチュニス(アルジェリア東端)を占領してアルジェリアの保護国化をはかった(1881)ことなどから、地中海での権益を脅かされたイタリアが加わり、【16: _____】ができた(1882)。まだビスマルクは健在である。しかし、「未回収のイタリア」をめぐるオーストリアとの対立などから、次第に距離をおくようになって

たイタリアは、第一次世界大戦勃発時には中立を宣言（1914）、翌年には同盟を離脱し、三国同盟は実質ドイツ・オーストリア同盟になった。

- 2) イギリスを中心とする三国協商とドイツを中心とする三国同盟は、次に示す図式のように対抗しながら、1910年以降、恐るべき軍備拡大を競い合ううちに、バルカンは「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれる事態に至った。



- 3) 三国協商側で参戦すればイタリアに「未回収のイタリア」に加えて【24: 】(クロアチア語ではリエカ) を与えるとのいわゆる「ロンドン密約」が、1915年4月26日、イギリス・フランス・イタリア間で結ばれたため、イタリアは5月以降三国協商側で参戦し、オーストリア・ドイツと戦った。

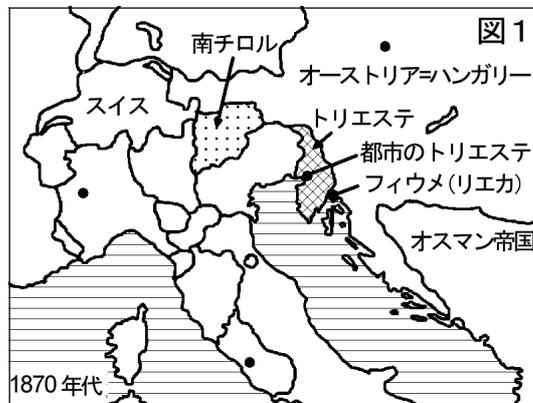
大戦後、南チロルやトリエステはイタリア領となったが、秘密条約で約束されたフィウメについてはユーゴスラヴィア(現スロベニア、クロアチア)領となったことに、イタリアは不満だった。

また、現在もイタリア領となっている南チロルについては、すでにその当時ドイツ系住民が長年にわたり居住してチロル州の一部として定着していたために、逆にオーストリア世論が「固有の領土を不当に奪われた」と反発してその奪回を求めるようになった。このため、イタリアはオーストリアやユーゴスラヴィアとの新たな国境紛争を抱える事になった。これが、イタリアにおけるファシズム台頭の背景となる。

「未回収のイタリア」 ここで「未回収のイタリア」について徹底的に解明しよう。 No.134参照

- 1) イタリア王国成立(1861)以降もイタリア系住民が多数を占めながら【25: 】領に残った南チロル・トリエステなどを指す。1870年代には反オーストリア意識を持つ自由主義者がこの地域の獲得をめざす運動(イレデンティズモ=民族統一主義・失地回復運動)を起こし、「未回収のイタリア」という用語を使い始める。これがイタリア文化・地域共同体の復興というイタリア・ナショナリズムを特色づける。経過は前掲の通りで、第一次世界大戦後、基本的に「回収」された。

- 2) チロル地方は広大で、主要部は現オーストリアの西部。チロル地方のアルプス以南の部分が南チロル。図説教材本は南チロルをしばしば単にチロルと書くのでワケが分からなくなる。「南チロルとトレンティーノ地方」と記す本もあるが、トレンティーノ地方は南チロルの一部である。図1は1870年代。



- 3) トリエステ(地方)とは、現在はトリエステ湾沿岸地域をさす。イタリア文化圏はイタリア領にすべきだというイタリア・ナショナリズムによればイストリア半島全域とその基部が含まれる(図1の斜めメッシュの部分)。現在、都市のトリエステはイタリア、イストリア半島はクロアチア、イストリア半島基部はスロベニアの領土である。図2は現代。

- 4) フィウメは、トリエステと並ぶ港町・自治都市で、20世紀初頭、市民のほとんどがイタリア人だった。1915年のロンドン密約で獲得を約束され、実現しなかった。第一次世界大戦後イタリアが占領・併合、第二次世界大戦後ユーゴスラヴィア(現在はクロアチア)。第二次世界大戦末期、多くのイタリア人がファシストとして処刑され、迫害を恐れたイタリア人のほとんどがフィウメを去った。図2。

2015 早稲田大学 抜粋

正解 b, e

20世紀初頭は、ヨーロッパにとって、急速に危険度が高まってきた時代でもあった。大きく (a) 二つの陣営 が不信感を募らせて対峙し・・・

問1 下線部(A)について、二陣営形成の基盤となった協定に関する次の記述のうち適切でないものを2つ選べ。

- ドイツとオーストリアは、三帝同盟の空文化に備えて独逸同盟を1879年に締結した。
- ドイツはロシアがフランスに接近するのを防ぐため、1897年ロシアと再保障条約を締結した。
- 露仏同盟は、プロイセンとの戦争以来孤立傾向にあったフランスとロシアが1890年代前半に結んだ政治・軍事同盟である。
- フランスがチュニスを占領すると、イタリアはドイツとオーストリアに接近し、1882年三国同盟条約が成立した。
- 三国協商は、1904年の英仏協商、1907年の英露協商、1908年の露仏協商成立の結果形成された軍事・外交的協力関係の総称である。